

いそながひでお
礒永秀雄

光市
(1921～1976)



【著作】
詩集『浮灯台』（昭和26・ユリイカ）
詩集『別れの時』（昭和34・ユリイカ）
詩集『燃える海』（昭和48・下関長周新聞社）ほか

「一九二一（大正一〇）年、仁川に生まれた礒永秀雄は、二二歳のとき、学徒出陣で南の島に送られる。一九五〇年からは詩誌『駱駝』を主宰するが、その詩精神の底には、戦争の危機的状況の中で見つめた、人の生命の原点への深い想いと、ふたたびそれをふみにじろうとするものに対決する厳しい意志とが、一貫して流れている。」

二〇〇一年四月一日に、光市室積の海に向かって建てられた詩碑の裏面に、「礒永秀雄詩碑建立実行委員会」の名で記された文章の一部である。

生前の礒永秀雄を知る者は、あの澄みきった微笑を忘れることができない。真実を求める心の純粹さが、更に、人の生命への深い愛が、内面から自然に現れ出たような微笑であった。その微笑の底にあるものは、礒永秀雄の詩を生み出すものでもある。だから、生前の礒永秀雄を知らない者も、作品を通して、やはりひきつけられるのである。

冒頭に引用した戦争の体験に基づくところが大きいことは、否定できない。

「南の小さな小さな島で／裸で はだしで暮らしていたころ（中略）遺書を書く紙もないから／足も立たなくなってしまうから／木の幹にいざり寄って／たった一つの文字を彫りつけたことがある／最初のそして最後のその文字は、しし」（「門」から）

戦死する友。死に直面する自分。生命そのものを見つめないではいられない。戦争の実態について考え、追求せずにはいられない。戦後、引き揚げて来た礒永秀雄が、文学活動によって行うべき課題は、明らかであった。

死後三十年近く経っても、礒永秀雄の詩は、多くの人に読まれている。自分をごまかさず、海のような深い愛につつまれて生きようとする読者の、それぞれの思いに応えることのできる力を、今も持ち続けているからである。

（文・陶山祐二）



『駱駝』100号記念会 中央が礒永秀雄

海がわたしをつつむ時（抜粋）

2

海がわたしをつつむ時
溶ける孤独
しみとおり拡がってゆく連帯
わたしのものとなるいのちのはじまり

海がわたしをつつむ時
わたしの肩に拡がる青い翼
ずっしりと重たいその力
立ちあがる傷の列 タスカローラ

海がわたしをつつむ時
空にあつては燃えさかる一つの星雲
地にあつては悲しみを吹き払う風
あなたとともに生きる水 また花びらを実を受けとめる土

わたしはひたす あなたの胸の谷 こころの小部屋を
乳と蜜と 海の花びら 潮の香りで
わたしはつつむ あなたがわたしを呼ぶ時
瞬時の玉をちりばめた崩れない青い門 海のいのちで

（詩集『海がわたしをつつむ時』所収）

※終わりの二連（八行）が、光市室積に建立された詩碑に刻まれている。

礒永秀雄 年譜

（提供・陶山祐二）（『駱駝』148号・一九七六年、「礒永秀雄の世界」長周新聞社・二〇〇〇年等による）

大正10（一九二一）年

昭和18（一九四三）年
昭和21（一九四六）年
昭和23（一九四八）年

昭和25（一九五〇）年
昭和26（一九五一）年

昭和28（一九五三）年
昭和30（一九五五）年

昭和31（一九五六年）
昭和32（一九五七年）
昭和34（一九五九年）
昭和35（一九六〇年）

昭和37（一九六二年）
昭和38（一九六三年）
昭和39（一九六四年）

昭和41（一九六六年）
昭和46（一九七一年）
昭和47（一九七二年）
昭和48（一九七三年）

昭和49（一九七四年）
昭和50（一九七五年）
昭和51（一九七六年）

《没後》

平成13（二〇〇一）年
平成16（二〇〇四）年

1月17日、朝鮮仁川に生まれる。

京城中学校から姫路高等学校を経て、東京帝国大学文学部美学科に学ぶ。

学徒出陣で、ニューギニアの手前にあるハルマヘラ島に送られる。

6月、光市に復員。光市の短文芸詩『あけぼの』の詩壇の選者に。

光市立室積中学校教諭（国語科）に着任。

小詩集『天路への誘い』、『聖玻璃彷徨』、『夜の聖歌隊』刊行。

結婚。

4月10日、詩誌『駱駝』創刊。

山口県立徳山高等学校教諭（国語科）に着任。

詩集『浮灯台』刊行。第一回山口県芸術文化振興奨励賞を受賞。

上田敏雄、和田健らと、『現代山口県詩選』を編集（発行は本年のみ）。

詩集『角笛』刊行。

創刊された『長周新聞』に「現代詩の根本問題」を発表して以来、多くの詩、童話、評論を発表。

詩劇作品集Ⅰ『夢の塔』刊行。

詩劇作品集Ⅱ『渴いた宿』刊行。

詩集『別れの時』刊行。

日本現代詩人会入会。

山口県立光高等学校教諭に転任。

童話集『四角い窓と丸い窓』刊行。

詩集『降る星の歌』刊行。

桑原圭介、和田健らと山口県詩人懇話会を結成。この三人を編集委員として『現代山口県詩選』を発行（以後、現在まで毎年発行）。

次男の地火志が骨髄性急性白血病で死去。

詩集『海がわたしをつつむ時』刊行。童話短編集『夢の柩』刊行。

山口県文学者訪中団の一員として一ヶ月中国各地を訪問交流。

詩集『燃える海』刊行。

仏教物語第一集『雪山童子』、仏教物語第二集『提婆と竜女』刊行。

仏教物語第三集『貧者の一灯』刊行。

5月15日、『駱駝』一四七号を発行。生前最後の編集となる。

7月27日、十二指腸潰瘍のため死去。9月30日、一四八号を「礒永秀雄追悼号」として、『駱駝』は終刊。仏教物語集第四集『二眼の亀』刊行。

4月1日、光市室積に詩碑を建立。

5月16日に開館した「福田正義記念館」（下関市）二階に「礒永秀雄の世界」を常設展示。